

エンカウンター (ENCOUNTER)

第247号

2022年11月1日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源先生「コリント人への第2の手紙講解説教」より (3)

天国は言葉ではない、力である

「主は霊である。そして、主の霊のあるところには、自由がある。(コリントⅡ 3.17)

これは、注目すべき言葉であります。「霊」は「聖霊」のことです。主の霊のあるところに、「自由」があるとという。人間の最も欲するところはこの「自由」です。「自由」とは、不完全なこの人間が思い通りになすことを指してはいません。人間がなすべきことをなす力を持っていることを意味します。その人は自由です。ハックスレイの言葉に、「人の最悪の困難は、人が欲することを自由になすことが出来る時に始まる」「man's worst difficulties begin when he is able to do as he likes.」と言いました。自由になるとは危険なことです。人間の歴史を見て下さい。最も害をなした人は、何でも自由に、思いのままに出来た人でした。なすべきことが分かっている、それを行なう力がない。こ

こが問題です。そして、宗教はこの力を与えます。この力を与えることが宗教の本質です。宗教というものは、ちょっとやっておいた方がよいといったアクセサリーではありません。生きるか死ぬかの問題です。現代は、その力が欠乏している時代です。今朝のテレビに当教会員の柴田（徳衛）君と芹沢さんとの対話がありました。芹沢さんは、「現代の日本の学生というものは、動物的には、最も恵まれている」と言っておられました。しかし、「なすべきことをなす」という力を君たちはどこで学びますか。そういうことはどこの学校でも教えません。ですから、所得倍増になっても、真の平和は来ません。パウロは、「福音は力である」と言いました。「天国は言葉ではない、力である」と言いました。

信仰はいつも「受け身」

「わたしたちはみな、顔おおいなしに、主の栄光を鏡に映すように見つっ、
栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく。これは霊なる主の働き
によるのである。(コリントⅡ 3.18)

これもまた驚くべき文句です。「わたしたちはみな」という字は、原語で始め
に来ています。大抵の場合この「わたしたちは」という言葉は省略されていま
すが、ここでは非常に重点を置いています。モーセ一人ではなく、信者みんな
です。「ヘーメース パンテス」(我々は皆)という言語を覚えておいてください。

「顔おおいなしに」は、「昔はおおいがあったのであるが、今は取り除かれ
て」という意味です。パウロは、主の復活体を鏡に映す如くはつきりと見てい
ると言う。ぼやっとではありません。

「見つっ」の原語は、他動詞ではありますが、自分の力で見ているのではあり
ません。「自分に見せられつつ」という受け身であります。信仰は何時も「受け
身」です。よろしいですか。「主と同じ姿に変えられていく」も同様、受け身で
「変えられつつ」(現在進行形の受け身)の意です。それは、人間の力によらず、
霊の働きによる、と言っておるのであります。

なすべき力が与えられる

これはパウロの一枚看板です。パウロだけではありません。ヨハネの第1の手紙第3章2節には、「わたしたちは今や神の子である。しかし、私たちがどうなるか、まだ明らかではない。彼があらわれる時、わたしたちは、自分たちが彼に似るものとなることを知っている」とあります。永遠不滅の栄光体を望んでいたがために、この世においては、「パルレーシア」、大胆さを持っています。我々すべては、今まで罪と自分の滅びの為に顔おおいがあったので、力がなく、なすべきことを行なう力を持っていなかったが、今や顔おおいが除かれて、聖霊の力によってははっきりと復活の主を仰ぎ見させつつ、変わっていくと言うのであります。キリストが来給うときに、直ちに (instantly) 栄光体になる。それをパウロは「永遠の生命の冠を目がけて走っている」という。それを、キリスト教では「望み」と言います。その望みによって、毎日、自分の前におかれた「なすべき義務」をなす力が与えられる。よろしいですか。金(かね)や名誉からはその力は出てきません。力は、真理の御霊から出て来ます。

10年後の感想

以上は、私が数え年 67 歳の時の説教です。今回復習してみましたが、1 週間、相当勉強して準備されていると思えました。現在の私にはそんな力はありません。そのため、現在、改めて付け加えることはありませんが、付け加えるとすれば、この 10 年間で、パウロの偉大さが分かって来たことです。人類の歴史、キリスト教の歴史において、始めのアダムとエバ、アブラハム、モーセ、そしてパウロとなる。それから、オーガスチン、ルッター、日本の誰かということになるのでしょうか。もし、福音の意義といえは、中国の善導をあげたいと思います。人類の福音の歴史についてあげるとすれば、モーセの次は使徒パウロです。この 10 年の間に、そのようなことが分かりました。

イエス・キリストは神の子ですから、別格です。イエスは人間の歴史には入りません。従って、イエス・キリストは神ですから、我々の信仰の手本とはなりません。真似は出来ない。

良く生きられた平凡な生涯が最も偉大である

我々が真似をするなら、パウロの真似をする。パウロは、モーセはこういったが私はこう言う、モーセと同じ地位で言っています。人類の歴史で、こんなに大胆に言った者はいない。聖書を読むとそのことがはっきりして来ます。パウロの偉大さ、福音の偉大さは、賜物、もらい物であります。私も同じです。ここでお話することは、すべて私から出たものではありません。すべて受けたものであります。受けたものを皆さんにおすそ分けしているに過ぎません。どうぞ皆さんもこの福音を受けて下さい。この永遠不滅の生命を受けて下さい。聖霊を受けて下さい。この世でちょっと喜んでいるとか、ちょっと安心しているとか、ちょっと善行が出来ている、そんなことよりも、むしろ我々の平凡な仕事において、誠に他人から見てとるに足らない平凡な仕事を、本当に永遠の生命を頂いて、それを行なって下さい。これに勝る善行はありません。いつも言うとおりの、デビッドソンの言葉「良く生きられた平凡な生涯 (an ordinary life lived well) が最も偉大である」を思い出して下さい。我々には、無限の善行が毎日目の前に置かれています。道は近くにありますが、人は遠きに求めています。

我々も、本日学びました最後の言葉、18節（これは未来形ではなく、現在形です）にあるように、この平凡ある人生において、毎日イエス・キリストの輝きに移されつつあります。本当の信者という者は、一日一日顔が輝いてくる。

信仰は力である

「しかしわたしたちは、この宝を土の器の中に持っている。その測り知れない力は神のものであって、わたしたちから出たものではないことが、あらわれるためである。」(コリントⅡ 4.7)

伝道者である私は、この宝を持っている。それはダマスコ途上で受けた福音の光、イエスキリストの復活体、自分もこの復活体とならせて頂くという永遠のキリストの生命、またそれを宣べ伝えるという宝のことです。この宝を土の器である朽ちる体に持っていると言う。これは立派な体ではありますが、栄光体に比べれば、土の器です。信者とはこういう者であります。そうでありますから、これから述べる無限の苦しみ、悲しみ(8-12節)に遭遇しても、それに打ち克つ力が出て来ると言っています。その力は神から出て来ます。パウロの書簡を読めば、パウロは我々が想像できないような患難、苦しみに遭ったことが分かります。殺されるような目に遭いました。精神的にも、肉体的にも、また、霊的にも貧しい身であるのに、神から頂いた宝によって、患難に打ち克つことが出来たと言う。これは、神の力がみんなに分かるために神がそうしたと言う。信仰は、議論ではなく、説明ではない。力であります。

人生にはへこたれない力が必要

「わたしたちは、四方から患難を受けても窮しない。途方にくれても行き詰まらない。迫害に会っても見捨てられない。倒されても滅びない。いつもイエスの死をこの身に負っている。それはまたイエスのいのちが、この身に現れるためである」(コリントⅡ4.8-10)

原文にも、現在形で書かれていますから、これは、いつもそうしているという意味であります。即ち、毎日、始終死ぬような困難に遭っているけれども、へこたれない。人生には、へこたれない力が必要です。この力が神から出ていることを君達に分からせるために、私は知識も少なく、体も弱い、と言っているのです。この苦しみによって、福音が人に伝わる。福音というものは、伝道者の苦難によって聞く人に伝わる。口でしゃべっているだけでは伝わるものではありません。

永遠の生命を与えることが福音の内容

「それは、主イエスをよみがえらせたかたが、わたしたちをもイエスと共によみがえらせ、そして、あなたがたと共にみまえに立たせて下さることを、知っているからである。すべてのことは、あなた方の益であって、恵みがますます多くの人に増し加わるにつれ、感謝が満ちあふれて、神の栄光となるのである。」(コリントⅡ 4.14-15)

パウロが信じて語っている理由は、君達コリントの全信者と共に神が復活せしめ給うことを知っているからであると言っています。パウロの伝道の目的は、福音を聞いた人と一緒に、神の前に復活するということであります。永遠の生命を願わない人がいますか。真に永遠に生きる者になりたいという望みは、誰でも持っています。しかし、地位とか、名誉とか、この世のものがそれを邪魔しています。誰でも本当に素直になれば、生きたい。死ぬのは嫌です。「永遠の生命を与える」これが福音の目的です。パウロは、自分の福音、イエス・キリストの福音はモーセの十戒に優ると、大胆不敵に言っています。パウロは、この救いは律法と無関係であると言いましたから、ユダヤ人から迫害を受けました。ユダヤ人にとって一番大事なもの(律法)を関係ないと言ったのですから。また、律法とは無関係に救われると言うことが、我々には必要です。我々に何か条件を出されたなら、我々はみんな落第でしょう。ただ、神の賜物によって、神の恵みによって永遠の生命を得るというのが福音の内容です。

内なる人は日々に新たにされて行く

「だから、わたしたちは落胆しない。たといわたしたちの外なる人は滅びても、内なる人は日ごとに新しくされていく。」(コリントⅡ 4.16)

我々は落胆すべき状態ではあるが、落胆しない。その理由は、外なる人、肉体は日々に滅びるけれども、内なる宝、即ち、永遠の生命は日々新たになるから。滅びると言うのは、これは人々のために身を尽くす、犠牲となることでもあります。ここに人生の本当の意味があります。人々は忠臣蔵の話が好きです。260年経った今でも、忠臣蔵が人の心に訴えるものがあるからです。外なる人が滅びても、義を立てたということが、人の心を打つのです。これが、本当の人生の意義です。犠牲的に自分の命を捨てることです。大石蔵之助は、山鹿素行から、「身は軽くして、義は重い」ということを教えられた。討ち入りの太鼓は、山鹿流の陣太鼓です。これを聞いて吉良家の連中は赤穂浪士が来たことを知ったと言われています。

我々はクリスマスを迎えて、踊っているだけではいけません。キリスト者は分相応に十字架を負わねばなりません。外なる人は滅びるけれども、内なる永遠の賜物である宝は、復活の望みは、日々に新であります。この故に落胆しないという。何も持たずに落胆するなど言ってもそれは無理です。無い袖はどうしても触れないのです。金のない者に献金せよと言っても無理でしょう。

苦難の意義は、永遠不滅の宝を思わせる

「何故ならこのしばらくの軽い患難は働いて、永遠の重い栄光を、あふれるばかりに私達に得させるからである。(コリントⅡ 4.17)

我々の困難はしばらくの軽い患難。パウロの受けた患難は重い。しかし、この永遠不滅の冠に比べれば軽いと言う。この軽く見える患難が働いて、いよいよ永遠の宝を望むようにしてくれると言う。ここに、「困難の人生」の苦難の意味が有ります。この「苦難の意味」を知りたい。我々は、苦難の意味が分からないから、すぐにへこたれてしまう。人生の苦難は、これによって我々が永遠不滅、滅びざるものを求めるために必要であります。私は、人生の苦難はなくならないと思います。新興宗教の言うように、信じれば、人の苦難はなくなってしまうと言う教えとは違います。苦難があればこそ、我々は真剣になる。この世が一時的なものでありうことが分かります。病気があれ「ばこそ、人間御生命というものに限りがあることが分かります。石館先生方の努力によってがんの治療薬が発見され、がんは治ったとしてもまた別の病気が出て来ると思います。私は、人間に罪悪のある限り、必ずや病気があると確信します。病気があった方がよろしい。その苦難の意義というものは、永遠不滅の宝を思わせるために働くというのであります。

見えないものは永遠に続く

「わたしたちは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に続くのである。」(コリント II 4.18)

見えるものとは苦難です。けれども我々は見えないもの、主イエス・キリストに目を注ぐという。苦難は、どんな苦難であっても、50年、70年も経てば必ずなくなります。竹上女史、矢内原先生は、胃がんの苦しみを受けられたが、それは永遠の苦しみではなかった。半年か、3カ月の苦しみです。それによって、その苦しみは終わります。見える苦難は一時的です。しかし、内なる生命は永遠に続きます。我々は、永遠不滅の宝をもって、しばらくの苦難に耐える力を与えられるのであります。祈る、我々もまた、この永遠不滅の宝を頂いて、この人生において、小さな苦難を担い得る者とならんことを。アーメン。

10年後の感想——復活体を頂くこと

これが10年前にお話しした講義でありますが、現在ここを講義したとしても、これ以上に申し上げることはございません。誠に、パウロの原文は宝玉であります。付け加えた注解は、土のようなものであります。どうか、皆様は、直接聖書をお読みになって、パウロ先生から、直接学びとられますよう。そして、聖霊の御力によって、聖書の言葉が皆様の力となりますようお願いしたいと思います。

何遍も同じことを申し上げますが、新旧約聖書の唯一の問題、the dominant theme は「復活体を頂く」ということでもあります。「我々は、日々復活体に近づいている」ということでもあります。このことが、聖書の唯一の問題です。「唯一のこと」とイエスは言われましたが、このことを我々は本当に学びたい。